

# 反障害通信

12. 6. 22

36 号

## 西洋は日本の「障害者」にとってモデルたりえるのか？

いつの頃からでしょうか？ 80 年が潮目の時となるのでは思っていますが、日本の「障害者運動」は大情況的には、独自の運動展開でやりきるのではなく、世界的な運動の輸入が主流で動いていく事になってきています。まずはアメリカの自立生活運動の輸入、そして国際障害者年とそれに続く 10 年の中での、いろいろな理念的なことの輸入、ガイアツからの法制度改変です。そして教育においてはインテグレーションからインクルージョンの理念の輸入です。そういうこととして、現在的に焦点になっているのは「障害者の権利条約」をその理念の輸入のなかで、障害者差別禁止法制定へ動くこととして進んでいます。

さて、ひとつ押さえておかねばならないのは、日本における新しい「障害者運動」が、輸入された運動の後ろに退くような状況がなぜ生まれたのかという事の総括です。

ひとつは、運動をひっぱった青い芝が「われらは問題解決の路を選ばない。」という運動自体を否定するような傾向をもっていたこと。もうひとつは、運動を領導する理論的なことが煮詰め得なかったことを押さえています。そのことの中身として、理論を問題にするひとたちの中で、知ということの抑圧というようなことがとらえられて、思想—世界観までふみこんだところからとらえ返す作業が出てきませんでした。「障害者運動」には、いつもジレンマのようなことがありました。運動（問題を解決するための活動）には有効性や効率性が求められ、しかし、一方でそのような有効性や効率性こそが、「障害者」を総体的相対的に抑圧する論理として働くということがあります。そのようなジレンマを、青い芝の横塚さんが「はやく、ゆっくり」という言葉で表していました。日本の新しい「障害者運動」—「だれも排除しない、させない」というところで、総体的なところで展開しようとする運動は、西洋の伝統でのフィロソフィ（知）というところでの哲学や思想を背景にもった運動とは違った様相をもったのです。そのような知に抑圧的なことを感じ、実践試行していくこともあったのだと押さえています。そのような思想的なことの別の背景としては、新しい「青い芝」を引っ張ったグループの出発点が仏教思想での共同体作りをしたこともあり、仏教的なニヒリズムがあったこともおさえておかねばなりません。何度か出てくるニワトリの突っつき事例は「差別はなくなる」というようなニヒリズムにとらわれていたことも示し得ます。しかも無宗教の国日本ではその思想の広がりを持ち得なかったということがあります。

「障害の社会モデル」を出したイギリスの論者にはマルクス思想の背景がありました。そして、ポスト構造主義ということが、既成の概念を覆すところで論攻が進んでいたこともあります。日本の場合、そういう思想的なことにむすびつかないままに、個人の思考と

してかなり、鋭い提起がなされていましたが、それが点として終わり、蓄積や深化がなされないままでした。共生の思想などには東洋的な思想的背景のようなこともあったのですが、そういう思想的なことがちゃんと議論され広げ深化させる動きにはなりません。

さて、このような西洋—日本（東洋）という二分法自体も批判されることです。西洋にも、「自閉症」のドナ・ウィリアムズさんや「認知症」のクリスティーナさんのように、知の抑圧のようなことをとらえ反転させるような論考も出ています。

さて、そこで現在の日本の「障害者運動」ですが、権利条約を法整備の中で批准し差別禁止法をつくるということ、そして教育におけるインクルージョン概念を徹底させ、さらにソーシャルインクルージョン概念として運動の中で展開していくというようになっています。いずれも、欧米発の運動とその理念を日本に輸入し定着させ、法制度改革・創設にいかしていくという構えになっています。

これは、欧米の「障害者運動」の進んでいる社会、遅れている日本の運動という構図でとらえ、そこでの輸入という構図なのですが、さて、問題は果たして欧米の「障害者」運動は進んでいると一概に言えるのかということなのです。わたしは、脳死臓器移植や尊厳死ということで欧米が先進国になっている現実や、自己決定をなしえるものだけがひとといえるというパーソン論、インクルージョンを唱えつつも、自己決定の尊重というところで、実質分離がかなり現存しているというヨーロッパに行った日本の関係者の報告を押さえつつ、もっときちんと検証していく必要を提起しています。一番の焦点になっている権利条約も、そもそも ICF をベースにして議論されて、ICF の問題性を含みこんでいます。ICF の中で出て来る「標準的」という語はまさに障害差別の論理として機能することです。ICF で謳う「社会モデルと医学モデルの統合」などというのは、まさになぜ「社会モデル」が出てきたのかの意味もとらえられない混乱としかいいようのないことです。そしてその権利条約のキーワードの「合理的配慮」ということばは、国際人権規約の先鋭性が「漸進的」という語で、その先鋭性を抜き取られて成立したということに共通する「妥協の産物としての条約の成立」を絵に描いたような事例としてあります。すなわち、それが「過度の負担をもちらさないように」というところで「合理的配慮」という言葉に落ち着いたとしたら、そもそも「障害者」はパターンリズムの対象から抜け出せないのではないのでしょうか？

そもそも「合理的」という語は翻訳語ですが、日本語になった「合理」の「理」や「知」の抑圧性を、かつての日本の「障害者運動」は感じとっていたはずですが、一部そのような指摘も出ているのですが、そのことが運動のなかで問題にされていかない、かつての運動の風化というようなことになっています。

もうひとつ、わたしは「社会モデル」ということはそのことから抜け出しているとは思いますが、未だに欧米的な主流の概念は人権論のくびきから抜け出せていないのだと思います。このあたり、人権という、「人」の持つ権利という発想自体が、「障害は障害者がもっている」という医学モデルにひきずられている、すなわち近代知の地平のもとにあるのだと思えるのです。人権論は今まで、「能力における差別は差別ではない」というところでありたっていました。それだとパターンリズムから抜け出せません。では、能力におけ

る差別も認められないというところで新しい人権論を突き出し得るのでしょうか？ それは「能力を個人がもつものとは考えない」というところでの突き出しになるのではないのでしょうか？ そもそも人権論は近代知の啓蒙思想—倫理主義から出てきていることで、その近代知の地平からは、「能力を個人がもつものとして考えない」という論攷は出てこないではないのでしょうか？ わたしは人権論は使えるというひとに、ルソーが性差別的、労働者差別的、障害差別的であったと批判される場所を押さえ、ルソー批判の中で、新しい人権論をだしてもらいたいと思っています。それが人権論になるかどうかの問題はその作業のなかで検証されるのではないかと思うのです。

そもそも欧米においても一枚岩ではなく、「障害の社会モデル」が、それまでの障害観を転換することとして出てきました。しかし、その「社会モデル」が批判される中で、いまひとつ整理されないままに、波及力を失ってきています。そして曲解されてきているのです。

もちろん論を深化させる動きも続いています。ひとつは、ポスト構造主義の脱構築論あたりから、もういちど「社会モデル」をとらえかえそうという動きです。それがどう運動につながっていくのかは、むずかしいこととしてあります。「脱構築」には「脱構築の構築」というとらえ方もあるのですが、「構築」よりも「脱」にウエイトがおかれ、運動を作り出すというより批判・解体のほうにウエイトがおかれるからです。

さて、わたしがやろうとしていることは、パラダイム転換の芽がある「障害の社会モデル」をマルクス—廣松の物象化論を援用しつつパラダイム転換をなしきり、パターナリズムなどから抜け出しえる反障害運動を作り出し得る理論形成をなしていきたい、その一翼を担って行きたいということです。それは関係論として展開しえると試行しています。

今回の読書メモにも書いていますが、廣松物象化論への批判も出ています。いろんな批判と対話をなしつつ、論の深化を少しでも為していきたいと思っています。

この文は課題だけを出すにとどめています。わたしがやろうとしていることのアウトラインをしめしているだけです。あちこちで、そしてわたしの本『反障害原論』でいくらか書いています。これから少しずつ論攷を進めていきます。本を読み、論攷をすすめれば進めるほど不勉強さを感じっていきます。ひとりでなしえることでもありません。協働作業者を求め、ひきついでいけるひとを捜してもいかなくはなりません。少しずつできることからやっていきます。

(み)

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 36号」アップ(12/6/22)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされない方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

## 読書メモ

『通信』35号の小澤「認知症論」ワールドから、今回は当事者のクリスティーンさんの本を二冊。

そこから反原発に戻って、原発大国フランスの事情を二冊続けて読む予定でした。で、わたし自身の当事者性で「吃音の素因論」の本が出ているのを知り、急遽はさみ、さらに『図書新聞』にすでに買って近いうちに読みたいと思っていた『マルクスの物象化論』の書評が載っているのを読み、その中で廣松さんが批判されているのを知り、またまた押さえがたく、これも挟みました。で、やっと、フランス原発事情に戻りました。

ハチャメチャな読書のようになっていますが、たわしの中では、それなりに必要に駆られて進んでいます。

たわしの読書メモ・・ブログ 202

### ・クリスティーン・ボーデン『私は誰になっていくの？—アルツハイマー病者からみた世界』クリエイツかもがわ 2003

オーストラリアの「認知症」の当事者クリスティーン・ボーデンさんの著書です。小澤さんがたびたびその本を引用し、来日の際に対談して、小澤さんが自らの理論と共鳴する実践をしていたひとととりあげていました。いや、それ以上に、当事者の思いをストレートに伝えてくれているとても大切なひとです。

このひとはオーストラリアの国の官僚としてかなりの地位まで上っていた人で、「一度にひとつのことしかできないなんて信じられない」とか部下の人たちを見ていた、「有能な」ひとだったようです。

で、「認知症」になって、まるでジェットコースターのような人生をおくることになるのですが、アルツハイマー病(実は後で診断名が変わり、その病名に小澤さんは疑問をもっているようですが(「画像からも、彼女のかかえる不自由からしても、彼女が認知症であることに疑いを差し挟む余地はない。しかし、画像はアルツハイマー病とも前頭側頭型認知症とも異なる、きわめて非定型なものであった。」223P)、ともかく「脳の萎縮」という病気としてとらえられます)になった後でも、結婚紹介所で知り合ったひとと結婚します。そのひとが「彼女は、・・仕事中心の、あまり性格のいい人ではなかったようです。彼女の友人に話を聞くと今のほうがむしろ性格がよくなったと言います。」214P という、むしろ病気が必ずしも否定的なものではないという反転させてみせています。

そのあたりは彼女が病になる前に信者になった宗教的な世界観もあるのですが、むしろそのあたりは一つの信念ややりたいことのある生き方の問題としてわたしはとらえ返しています。そのことはポールさんも書いています。「精神性の重要性についても知りました。これは宗教に限らないことです。私の精神性はキリスト教にもとづいていますが、他の人にとっては、心の平和(平穩)を感じさせているものが何かということです。それは、芸術であったり、絵であったり、歩くことである人もいるでしょう。・・・」212P

いつものように、特に著者の心理的な所を軸に抜き書きします。

「私はどういうわけかますます伸びきって、ますます直線的になり、思考の歩みは一步一步、さらにゆっくりになった。かつて私がもっていた、あの活気や、あらゆるものを関連づけ想起する時のざわめくような感覚、興奮と、その興味の中心にあるものは失われてしまった。それまでの自分を特徴づけていた情熱や欲求もなくしてしまった。それが、すべて悪いというものではない。この直線的なやり方で、聞いたり、見たり、雲や、木の葉や、花……といったものを深く味わう心の内部空間が大きくなっているのです、駆り立てられたり、いらだったりすることはない。そしてカレンは確かにこんな私のほうがよいと思っている。」 66P

「このような人生のどの側面においても、私という存在の中心は、いつもその中にあり、いろいろな形の私の中にその姿を表している。この「私」独自の本質は、私の中核にあって、最後まで私に残るものだ。私はきっと今までより、なおいっそう真実の「私」になっていくのだろう。」 67P

「親戚や友人が、癌や心臓発作でも恥ずかしいとは思わないのに、なぜ脳の中というだけで、ただ身体的に浸される病気をそんなに恥じるのだろうか？」 69P

「不治の認知症だと診断されるのは恐ろしいことだ。何年にもわたって、すべての正常な精神機能を失っていき、いつ何が起こるかも、どれだけの時間がかかるかも正確に言える人はいないことを知る。そんな状況に直面している。」 71P

「それって私にもよくあることだわ!」といわれることがある、それは「何とかして私にいやな思いをさせないよう、私に変な人というよりは、「正常」な人に近いと感じさせようとしてくれただけなのだ。」「しかし、私はアルツハイマー病でないことと、正常であるということが、どのようなものかをはっきりと知っている。」「今は、頭の中全体にぼんやりと霧がかかっている、何をするにも大変な努力とコントロールが必要だ。大変な努力を払わなくては、いつも間違ってしまう。しかし、「正常」な人たちは、ただ常軌を逸しないためだけに、こんなにも多くの努力を要することはない。」 74P

「一所懸命にやろうと努め、よく休憩を取り、少しも疲れていない限り、私は大丈夫だ。その時は、ほとんど正常といっても通るだろう。でも、心の中では、まるで爪を立てて絶壁に張り付いているように感じている。そこに居るためには、大変な努力がいる。コントロールを失うことは、すっかり「イカれてしまう」ことだった。」 75P

「問題は頼むことをいかにして思い出すか! という点にある。」 81P

「私の「どろどろした糖蜜のような脳」の内部で、言葉がごちゃまぜになっている感じときたら、まるで、頭の中に言葉の本棚があって、話題等によって適当な場所にすべてきちんと整理されていたのに、床に押し倒されて、ごちゃまぜのひとかたまりになってしまったようで、それを分類し直して、その中から自分の言おうとする言葉を探しだそうとしているようなものだった。／ある日、目が覚めて、話そうとすると、どうしたことか頭の中の文から言葉が一跡形もなく一消えてしまっている、とちょっと想像してみてもいい。言おうとしても、全体の意味について感じはつかんでいないのに、大事な構成部分がぬけている。ゆっくりと口が待っていると、ぼんやりと霧のかかったような脳は悪戦苦闘しながら、時にはふさわしい言葉（あるいは、それにかなり近いもの）を見だし、正しいかどうかを考えながら、注意深くゆっくりそれを言う。」 91-92P

生活になくなくてはならないもの—タクシン（薬）、日記帳、頭の体操、パーセラピー（ゴロゴロ猫療法・・・猫を膝に抱えての癒し）、耳栓 95-101P

「いつ、どんな機能が失われるのか、誰にも予測できないのだから、このアルツハイマー病は興味深い冒険である。私は科学的な見方を身につけたおかげで、自分自身で体験し、自分に起きることを記録する、またとない機会を得たと感じているし、暗い気持ちになる時は「腐れ脳」と叫んでしまうのだが、それについて何らかの洞察ができるのではないかと希望もしている。」 104P

「はっきりした模様がある床を歩くことが難しい」 135P

「私はすべての経験を楽しもうと思う。たとえ、その経験を瞬間から瞬間に忘れてしまったとしても—その瞬間の経験で、私には十分である。ある日、娘たちがわからなくなることがあったとしても、それでも彼女たちは大好きな人たちなのだから、一緒にいることを楽しむだろうと思う。娘たちへの愛は決して変わらない—変わるのは、顔の特徴にラベルを貼る能力だけだ。」 159-160P

「彼女のように、認知症になっても積極的に新しい人生を歩めることを示す人がふえてくれば、認知症そのものは、普通の人的人生をそう大きく狂まわさせるような病気ではなくて、おかれた環境や社会的関係あるいは医療的介入のあり方が認知症本来の姿を過大に見せているにすぎないことが、しだいに明らかになっていくことでしょう。」 220P(石橋康次「クリスティーンさん訪問の記録」から)

石橋康次「クリスティーンさん訪問の記録」ポールさんの発言から「病に焦点をあてるのではなく、人に焦点をあてることが大切です。」 221P

最後に小澤さんのコメントが寄せられています。冒頭「クリスティーン・ボーデンさんの文章は、私たちに新鮮な驚きと貴重な発見を届けてくれる。」 223P

「しかし、これらはいわば外側から認知症を病む人を研究し、観察し、対応する視点である。このような見方もむろん必要ではある。しかし、これまでは認知症を病む人が私たちを、そしてこの世界をどう見ているのかにこころを寄せるという視点がかけていたのではあるまいか。これは、これまで認知症を病む人たちは処遇や研究の対象であっても、主語として自らを表現し、自らの人生を選択する主体として立ち現れることがあまりに少なかったことによると思われる。とすれば、これまでの認知症ケアは、認知症を病む人たちにとってどこか的はずれになっていたに違いない。」 225P

「ここまで、長年、認知症ケアにあたってきた者として、彼女の文章から、認知症を病む人たちと関わる時に気をつけておかねばならないことを拾い出してみた。これだけでも、これまで意欲障害、攻撃性、感情の不安定、易疲労性などという症状記載ですましてきたことがいかに雑ばくで、彼らを傷つける行為であったかが分かる。そして認知症を病むということの不自由をもっと暮らしの場面に即して理解し、彼らからみた世界を知り、寄り添うようにケアにあたることの必要性を教えてくれる。」 229P

「この書は希望の書である。抜け出すことの困難な事態に遭遇して、いったんは絶望の淵に断たされても、そこから再び希望に向かって歩む勇気の物語として、私は読んだ。人間の強さとでもいったらよいだろうか。しかし、その強さを彼女だけの強さと考えてはなるまい。／認知症を病むということが、人の手を借りて生きざるを得ないということであ

るとすれば、希望は人と人とのつながりに求められねばなるまい。希望に誘うその手は優しさに加えて認知症を病むことの困難を知り尽くしていなければならないだろう。例えば、身体障害なら、リハビリテーションの考え方や技術の莫大な積み重ねがあり、理学療法士や作業療法士という専門職もいる。だが、認知症の場合はまだどうしてそこまでいいはない。私たちはこの書によって、ようやくそのスタートラインに立ったと思う。」229-230P

さて、今回は、当事者の苦しさというようなこともかなり抜き出してみました。わたしがやろうとしている「「障害の否定」の否定」への反論となるようなことです。むしろそのことへ再提起・批判する中で対話を進めようという意図をもってのことです。

当事者の苦しみということには、クリスティーンさん自身がそのことを反転させる様な試みや障害を無化とする試みをしています。また、理想の介助者的なパートナーをえて、むしろ苦しさだけでない、だけでないというより反転させた素敵な生活にも入っています。小澤さんがクリスティーンさんのことを援用すると、「彼女はほんとにアルツハイマーなのか」とか、乗り越えることを可能にした、もともと持っていた能力の高さというところでの特殊ケースという反論が出て来るようなのです。ですが、逆にそもそも能力が高いと評価されていたところでの葛藤があったらうし、むしろ「自己同一性が崩れていく」苦しさということであれば、そもそも自己同一性とはなんだろうという提起から、そしてその背景にある近代的自我—近代的個我の論理自体の批判もクリスティーンさんや小澤さんから出ています。

今、ここでの苦しさということは間違いなくあるのですが、その苦しさとは今、ここでの苦しさとしてでてくることですが、一体その生きがたさ—障害をどうなくしていけるのか、それは医学モデル的な「障害」ではなくて、社会モデル的な障害の止揚としてあるのだと考えています。このあたりもう少し生きがたさのなかみを整理しながら論考を進めたいと思っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 203

・クリスティーン・ブライデン『私は私になっていく—痴呆とダンスを』クリエイツかもがわ 2004

前回メモと同じ作者、続編です。

前回の本でも紹介されていたケア・パートナーのポールさんと結婚して名前が変わったのです。

前回の本は「認知症」の「発症」ということを軸にして書かれていたのですが、この書はその後の運動的なことを「第1章 ジェットコースターの旅 出会いと挑戦」で書いています。偏見にさらされた、ステレオタイプ化された「認知症」への挑戦として当事者運動ということを起こし、展開していったのです。そしてその啓蒙的なこととして「第2章

痴呆症がある—それはどんなことなのか、話しましょう」を展開し、「第3章 私たちがして欲しいこと 痴呆とのダンスを踊るパートナーへ」で具体的に何を支援として求めるかを書いています。そして「第4章 自己発見の旅 私は私になっていく」と展開として

います。これは当事者運動のありかた、なにが問題なのか、なにを求めるかということを展開していく、ひとつのひな形のようなことも示してくれています。

「障害の否定性」の否定で、この論攷は注目すべき展開をみせています。

「自閉症」でドナ・ウィリアムズが言葉の世界—感情の世界と世界の違いというところで、否定性を否定してみせたのですが、この著者のクリスティーンさんも「認知の世界」—「感情の世界」—「魂の世界」というような展開をしていて、「認知症者」の世界を否定的にとらえられないような突き出しをしています。ただ、ドナは世界を分けたのに対して、むしろ移行というところや、割合が変わっていくというような展開の仕方になっていて、そこではやはり否定性に引きずられています。そして、「魂の世界」という言い方自体にキリスト教的な世界観があり、「私になっていく私」は「魂の私」となるのでしょうか、そこで存在が否定されないような錯覚をもたらすのですが、そもそも神がいればという架空の話になってしまいます。わたしはこのあたりはむしろ神を関係の総体としておいて、魂というところは関係のなかのわたしというところで表し得るのではとったりしています。で、実体主義な「私」でなく、「関係の中のわたしとしてのわたし」になっていくというようなどらえかたをわたしは考えていました。

さて、著者はその世界に入る前はエリートで、その「能力」で他の「認知症者」との違いが出ていてマージナルパーソンの価値観の引きずられの問題も起きています。何人もの医師からも「認知症者とは思えない」と言われるようなところに居ます。だからこそ、二つの世界のつなぎ的なところで、語っていくことができたのですが、むしろ、その語りがどこまで他の「認知症者」の思いを組み込んでいるのかという問題も出てきますし、反転はさせつつも、結局はその準拠枠を認知の世界においてしまって、「できること」が良いことだというような「認知症者」の否定性につながってしまう価値観に引き戻されていることもあります。だから、むしろ著者自身もなしている関係性というところから、関係性をつくりあげていくというところで、反転させていくことが必要ではないかと思うのです。繰り返し、「今ここで」の、「社会」に広くある否定性からめとられる、ひきずられることから、関係性そのものを変えることなしには、抜け出せないのかもしれませんが、それでも著者は新しい世界に踏み出したとは言えると思います。

いつものようにことばの抜き書きもしておきます。

性格の変化 121P・・・変わった方の評価

人間としてみる 121P・・・見られていない現実

今を生きる 125P・・・「私たちは時間処理の感覚がないので、過去も未来もなく、「今」という現実の中に生きている」・・・著者のこの論攷には否定的なニュアンスがあるけれど、自然の中で生きる民の生き方に通じる、時間というところで物象化されない世界

やることリスト 134P

きりがかったような世界 135P

記憶の鍵・・・ヒントをだしてもらい、質問を繰り返す 138P

名札を覚えずに生きられる方法 140P

感情の世界での交流 141-142P



うろうろと歩き回る 146P

認知の世界に対置する感情の世界 185P

スティグマからの解放 191P

「知的障害」と「痴呆」のリンク 192P

レッテル貼り 193P

ごちゃまぜの感情とわずかな認知 200P

家族ケアの問題 200P

ケアパートナーシップ 202P

「私」はこの病気の脳以上の存在・・・「魂」・・・何か？

アイデンティティの危機とからっぽの自分というウソ 210P

感情の存在としての自分 213P

今 215P

ほんとうの自分 219P

私は私 220P

「痴呆とのダンス」 222P

スティグマによって孤立するという社会の病 222P・・・反転

サバイバーとして 225P

病はプレゼント 226P

「私たち自身が痴呆になったら自分がなくなるという「痴呆のウソ」を捨てれば、サバイバーとして新たな将来を創造できる」 227P

「人生から何を欲しがるかではなく、何を与えられるかなのだ！」 228P

「賢者は手放すことができる。手放すことは無限の喜びを得ることにほかならない。」・・・仏教のことばの引用 232P

「私たちはこの私たちの世界と、あなたの世界の両方を知っている。そしてこの新しい痴呆の世界に足を踏み入れた。あたかも二つの文化に精通するように、私たちは、あなたの世界と私たちの間にある溝を踏み越えた。」 232P

たわしの読書メモ・・・ブログ 204

#### ・山口昌子『原発大国フランスからの警告』ワニ・ブックス 2012

福島原発事故が原発大国フランスでどう受けとめられたのか、そしてフランスを中心にしたヨーロッパの原発事情を書いた読みやすい本です。

著者はフランス在住のジャーナリストです。ジャーナリストというのは、中立的なということが求められるようで、しかも、フランスの事情を伝えるというところで、フランスの世論が原発支持というところから抜け出せない現状をかなり客観主義的に書いています。

まず、どう受けとめられたのかについては、安全神話をつくりあげ、ちゃんと対策を講じてこなかったことを犯罪 37P として押さえ、これを人災 44P106P としてとらえています。・・・わたしは人災というとらえ方にはチェルノブイリ事故を日本で人災として押さえたことと同じような構図があり、むしろ危険性を感じます。そもそも原発自体の危険性を

なきものにしようということがその言葉に込められているのです。

そして、フランスがなぜ原発大国になっていったのかの分析が出てきます。それは、米ソ冷戦の構図の中で独自路線—独立ということでの「抑止力としての原爆」ということにフランスもとらわれ、その相互技術作用というところで、原爆実験と原発の技術の開発の途を進んだこと。また、石油資源のない中でエネルギーの独立というところで原発に活路を見いだそうとしたことがあります。国防の独立、エネルギーの独立という（177P）ところでの原発大国になっていった構図があります。また、キューリー夫妻以来の放射線の研究の「知識の伝達」というところで、放射線技術を維持しようとしたことなどが上げられています。120P

そもそも核の抑止力とは米ソに比べれば「張り子のとら」という状態なのだということも書かれているのですが、それでも、フランスのアイデンティティというところで、核の途に踏み込んで行ったのでしょうか？

フランスの場合、フランス革命の「自由、平等、博愛」というフランス革命を民衆自身が担ったというところで、フランス共和制の国家への思い入れがあり、国家主義的なところからめとられ、国防の独立、エネルギーの独立というところからめとられてしまう構図があるのかもしれませんが。そのことが原発の是非をタブー化することにつながっているのでしょうか？

そして、著者は日本との違いというようなことを書いています。それは日本が安全神話というようなことを作り上げ、また情報を抑え込んでいく傾向が大きいものに対して、事故ゼロはありえないとか、ガラス張り、また規制監督の機関の独自性をまがりなりにもつくりあげていっていることがあります。しかし、デカルトのくにというところで、危険性というところでの感情的なことを抑え込む構図もあったし、チェルノブイリの雲という気圧の配置がフランス国内に放射線被害をもたらさなかったというウソがあったということも書かれています。結局国家などというものの隠蔽体質は五十歩百歩なのかもしれません。

もうひとつ、博愛というところでの連帯という中身で、日本への援助に動いた事が書かれています。この自由・平等・博愛ということの中身なのですが、著者は支配されない・支配しないというところでの核抑止力なりという問題にリンクさせているのですが、そこで支配しない支配されないというような書き方をしているのですが、支配しないというのは、フランスも植民支配を進めてきた国で、真っ赤なウソにすぎないことです。このあたりが原発をもつ国になったこととつながっていることなのかもしれません。

そもそもフランスでも原発事故が起きていることが書かれているし、しかも原発への侵入とかテロとかまで起きている事情も書かれています。資本主義的経済の論理で、経済停滞をなりをさけるということで、すでに作りあげている原発体制を維持しようという採算の論理も働いているようなのですが 174-176p、デカルト的近代合理主義の発祥の地、フランスにおいて、なぜ、原発が結局採算の合わない、危険性から逃れえないということがどうして理解できないのか、不思議なのですが、結局日本のように自国での大規模事後がおきるまで、科学神話にとらわれ、原発からの撤退はしないのでしょうか？ どうしても分らないのです。

著者は「フランスの原発問題は、煎じ詰めれば、「エネルギーの独立」という国家の大原

則と「炭酸ガスの排出削減」という地球規模の人類共通の役割、そして「安い電気料金」という生活に密着した経済性—この三つの異なる要素を「安全」という括弧でくくって回答を探し出すことにかかっているといえる。」225P とまとめ的に書いているのですが、安全ということで括弧にくくるのではなく、安全ということで、そのような論理を無にして、まずひとが生きる環境を確保しなければならない、安全ということから出発することではないかと思えるのです。

だから、「アンリ・ベクレルやキュリー夫妻といった物理学者に原子力という、いわばパンドラ箱を開けたフランスが今後、「原発大国」としてどんな道を歩んでいくのか、日本にとって、フランスの進路を注視し、参考にするには決してマイナスではないはずだ。」225-226P のではなく、日本がフランスに脱原発・反原発の道をしめすことではないでしょうか？ それでもフランスは自国でチェルノブイリ級の事故が起きない限り、人災だといって他山の石にできないのでしょうか？ ちょうどチェルノブイリの事故を日本がロシアの国民性による人災だとして、きちんと議論をなしえなかったように。歴史は繰り返される1度目は悲劇として2度目は喜劇として、とありますが、3度目はもはや何とも言いようのないことなのですが。

たわしの読書メモ・・ブログ 205

#### ・菊池良和『エビデンスに基づいた吃音支援入門』学苑社かもがわ 2012

まず、本の題名になっている「エビデンス」ですが、「エビデンスは、「科学的根拠」と訳され、統計学的データをもとに解釈されるものである。」と著者は紹介しています。

さて、科学というと、福島原発事故の前にタレントの石原良純さんがテレビで「原発が危険だというのは科学を知らない人の発言だ」といって、その数ヶ月後に真反対の事実、原発事故がおきたことをわたしは想起してしまいます。

差別ということを考えてきたわたしは、科学ということの差別に果たしてきたことを『科学の名による差別と偏見』という書から始まり、つい最近の原発事故から始めた、原発—エコロジー関係の学習の中でリンクした近代科学論関係の学習につなげていました。で、わたしは科学という言葉自体に、ぞっとするような感覚さえ抱いてしまうのです。断っておきますが、わたしのやろうとしているのは近代・現代科学批判であっても、反科学ではないと思っています。論理性という意味では、(一方で、「知の抑圧性」ということを押さえつつも)わたし自身論理性を追い求めてきました。ですから、ぞっとしているのは、「科学という名における非論理性」なのかも知れません。

さて、この本は「吃音者」の「吃音」を臨床にしてきた医者の方の立場での書です。「吃音」関係の本は初期のアメリカ関係で理論的蓄積以降、「理論の貧困」状況があります。ジョンソンやヴァンライパーという「吃音」研究第一世代以降、対処療法的な論攷は多く出されているとはいえ、そもそも「吃音とは何か」というような原理論的な研究はほとんどみられません。

著者もそのような思いの中で、エビデンスということばをもって、理論的深化を担おうとしているのでしょう。エビデンスというところであまり進んでこなかったということの

中で、自らがそこに踏み込んで行こうという意欲作です。「吃音者」の子どもたちへのおもいのような事も感じられ、そして、医者として親の「誤った認識」による自己を責める事態を軽減しようという思いもあるほんとうに意欲作なのです。

で、その意欲ということへ水を差すようなことをしてしまうことへ躊躇があるのですが、科学知を問題にしているところで、相互批判の中で論考を深めていく姿勢が必要ですし、この本の著者にも、当然そのような思いで本の出版にいたったのではというところで、あえて批判という対話を試みます。

さて、「吃音は体質7割、環境3割」などという事が出てきます。そもそもなんの話かよく理解できないでいます。すべての「吃音者」にとってそのことが当てはまるのか、一人ひとりの「吃音者」にとって蓋然的にいえることなのか、統計ということを問題にしている文脈からして、平均値としていっているのかと憶測しているのですが、科学知ということの問題にしているひとが、こんなざくっとした書き方をしているのがよく分かりません。この本は入門書と名うっていますから、わかりやすくと言うことでざくっとした書き方にしたのでしょうか。このような断言的論考がかなり出てきます。どうも分からないのです。

冒頭書いたのですが、そもそも科学ということをなんの疑念もなく出していけるということが科学知になっていないと思うのですが、どうでしょう？

そもそも著者がエビデンスということに込めた統計学という手法は、条件設定を間違えると、わたしのいいかたをすれば、函数をおさえそこなうと使えなくなります。函数を何かぬけおとしているのではないかという思いがわたしには出てきます。わたしが最近学習していたことに引き寄せていけば、「アルツハイマー」の診断の際に他の可能な感染症などを排除して始めて、その診断をなす、しかもそれも、診断名が変わることがあります。そうなるといえるのは「可能性があると考えられる」ということであって、断定的な物言いをしていくのは科学知ではないというしかなくなります。著者も書いているように脳のことは分かっていないのです。話を行きつ戻りつしていますが、「アルツハイマー」のクリスティーンさんのCTスキャンをみて医者が「そのスキャンがあなたのものものであったら、あなたがそんな講演などはできない」という断言するようなことがあります。科学という名の下に現実から演繹していくのではなく、現実をねじ曲げる、非論理的「科学」が横行していくのです。

わたしは科学知はすべからく仮説であると思っています。実践的な場で試行錯誤していく為の仮説です。

絶対知は神の想定であり、科学に絶対などありえません。

それに現代科学において近代知の因果論的世界観から、相作的世界観へのパラダイム転換ということが言われていました。そういうところでのこの著者が究極の因果論としての素因論で、二大素因論の脳と遺伝子ふたつともにはまってしまって、二重の素因論になっていることが理解できないのです。科学というのなら、科学論で問題になっているパラダイム転換論はこの著者にはとどいていないのでしょうか？ パラダイム転換ということが、科学においてあらゆる分野に起きてきています。別の視角からいうと、素因というのは

100%でなければ有効ではありません。科学に 100%などありえないことなので、そもそも科学知ということの問題にしているひとがこのような断定的な論考を書いていることが分からないのです。それに、統計学的手法で出て来るのは並行関係、相関関係であって、因果的な断言はとてエビデンス＝科学知とはいえなくなるのです。

さて、この著者の統計学的手法の、元になっているのは、「吃音の双子研究」のようなのです。15P 一卵性と二卵性との比較による遺伝子の相似性の違い、そのことによる脳の変異の差ということでの吃音の素因論という論考になっているようなのです。

そもそも遺伝子も脳の変異もなんの実証性もないのです。そればかりか、逆に論証できる可能性さえあります。そもそも双子研究は環境が違う環境で育った双子には「吃音」が出る一出不いの違いが起きている事例があるから、「吃音」は素因ではなく環境問題が大きいということが出されていきました。その事例は統計的にデータが少ない中で言われていたことと無視されたのでしょうか？ わたしは著者らの双子研究からくる素因論への批判的観点をひとつ示し得ます。それは、ひとにはそもそも一般的に共振性があるのですが、双子の場合、そして一卵性の場合の方が共振性が強いということです。一方に「吃音」が出れば、もうひとりにも「吃音」がでるということは素因論でなく、むしろ共振性による学習説—環境的問題として示し得ます。

「吃音の脳科学」25P という図表が出てきます。これは「吃音者」の脳の分析なのか？ 疑問に思えます。というのはどこの部位がどうなったら吃音が出るとか、そういう研究など皆無ではないでしょうか？ 他の「障害」から類推される脳機能を「吃音」にさらに類推したことにすぎないのではと思えます。それも、他の「障害」でも、何か関係があるらしいというようなレベルでの研究です。憶測に憶測を重ねているのです。これは著者が書いているエビデンスのレベルV以前の、論理性においておかしいという話です。

それに喉頭摘出で「吃音」的な事が出ている、ということも書かれています。22P 喉頭摘出と「脳の障害」の関係という問題がでてくるのでしょうか？ 何か話が錯綜しているのです。

さて、この著者は医者立場で「吃音」における親の責任ということで、責任感にさいなまれることを救おうということで、素因論を持ち出したようなのですが、では、素因論というところで、本人も責任ということでは抑圧型の差別からは軽減されるとは思いますが、「どうしようもない」こととしてむしろ排除型の差別を増長していく事になるのではないかと思うのです。著者は「吃音者」です。親への思い—救いを「吃音者」への差別をさておいて求めるということがいかなものかと思うのです。

もちろん、「吃音者」への抑圧を軽減するために、「あなたは悪くない」122P というところで論理集約しようとしているようなのですが、そんなことをいっても現実味がありません。現実に言語規範で差別されるのです。社会に「吃音は悪いこと劣ったこと」という社会意識があるのです。だからこそ、著者も参加している「吃音者」の当事者団体である言友会で、「治す努力の否定」という内容も含んだ「吃音者宣言」が出された以降も、その「宣言」への批判からあくまで「吃音を治すことにこだわる」流れが言友会から消えなかった

のです。だから、わたしは、そのような社会意識がどこから出てきているのかを押さえ、社会を変えることなしに、「宣言」的な「自分たちの気持ちの持ち方を変える」とか、「あなたは悪くない」などと言っても、ほとんど意味がないと主張してきたのです。むしろ、「吃音」に関する二つの言語規範、ひとつは音声言語でコミュニケーションをとるべきだ、ひとは一定の流暢性で話すべきだ、という言語規範で「標準的人間像」から逸脱しているとして差別があることこそが問題なのです。そしてその差別がどこから来ているのか、そして差別をなくすにはどうすればいいのか、これはすでに別のところで展開してきたことです。詳しくは、わたしの「吃音」問題に関する論攷—「「吃音—吃音者とは？」ノート」—を読んで下さい。<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/adshp/od1-sts.html>

たわしの読書メモ・・ブログ 206

・佐々木隆治『マルクスの物象化論 資本主義批判としての素材の思想』社会評論社 2011

著者も書いていますが、マルクスほど曲解や誤解にさらされている思想家はいないという思いをわたしももっています。そういうところで、マルクスに立ち戻って、マルクスの思想の核としてある（著者がそうとらえる、わたしもですが、）物象化論をとらえ返そうという意欲作です。

この本には、わたしが理論的・思想的影響を受けた廣松さんへのコメント、批判が多々出ているのを、本屋の店頭で見つけました。そのことを巡ってとらえ返し、著者と対話したいという思いを抱いて、この本を購入していました。かなり、細かい論攷になっていて、文献を当たりながら読む必要を感じ積ん読してしまっていました。そういう中で表さんが『図書新聞』No.3061 2012.5.5にこの本の書評を書いていて、しかもその中で廣松批判をしていたので、これはどうしても読まねばと急遽読書計画の中に先行織り込みました。

そもそもなぜマルクスなのか、というところをおさえねば、ただの訓詁の学になります。著者もそのあたりを押さえています。

初期マルクスの思想形成過程を論攷の対象から外しています 20P。で、マルクスの哲学・思想が押さえられなくなります。なぜマルクスが哲学的なことを論じなくなったのかということで、(表さんがヘーゲル云々ということを書いているのは、きっとマルクスが青年ヘーゲル派から出てきて、そのことがマルクスの思想の中に生き続けているとおもいがあるからではないでしょうか?)著者はマルクスが哲学を放棄したととらえ返しています。このあたり、わたしも三浦つとむさんの『弁証法とはどういう科学か』あたりを学習の初期に押さえていて、廣松哲学をやりながら、哲学ということばに最初は違和をもっていました。しかし、青年ヘーゲル派内の論争からマルクス/エンゲルスの思想形成がなされてきたこと、廣松さんの実体主義批判としての物象化批判は哲学的な押さえなしにあり得ないと、哲学の必要性に思い至らざるをえなかったのです。確かに文献学的には、マルクスは廣松さんの物象化論的などころは展開していず、廣松さんのマルクスのテキストクリティークというか、かなり意図的な読み込みなのですが、むしろ単にマルクスが何をいったかではなく、マルクスからなにをとらえ、自らの論としてどう展開していくのかということこ

ろで、わたしは廣松物象化論自体の検証が必要なのだと思います。著者はマルクスは廣松さんのようなことは言っていないというだけで、廣松さんの論に踏み入っていません。むしろ誤読して、「啓蒙思想として廣松理論」とか、意識論だとかいうことを書いています。そのあたりは、廣松さんがマルクスの思想形成過程で、ブルノー・バウアーの自己意識を批判していることを押さえていることを記せば、誤読だととらえかえせるのではないでしょうか？

そもそも著者は「新しい唯物論」を宣揚しています。その「唯物論」ということは哲学でないのでしょうか、そして著者が主題にしている「物象化」の概念は哲学なしにでてこないのではないのでしょうか？

著者の廣松批判 38P への論考ですが、廣松さんの理論をどうも実践的ではないととらえているようなのですが、むしろ廣松さんの思想は現実の変革としての革命の思想としてのパラダイム転換論・・・訓詁の学ではない、マルクスの思想の継承と展開としての廣松理論なのです。

廣松さんはほんとにいろいろな人との対談をしています。その中での議論を見ていると、マルクスの後期における実践的広がり共通するような実践性をわたしは廣松さんに感じていました。また、そういうことがあったからこそ、わたしの反障害論がいくらかなりとも廣松理論を継承展開しえていたとしたら、そのような廣松物象化論の援用として展開しえたのです。

さて、この本を読みながら、マルクスの読み込み・再学習や廣松さんの本の読み直しの必要を感じています。そこから、この本の細かい批判をと思っているのですが、いつになるか分からないので、とりあえずいつものようにメモを残しておきます。

最初に著者の廣松批判を押さえておきます。

著者の廣松批判の要点として、

- ① 哲学・認識論として展開していることの批判
- ② 廣松物象化論を隠蔽論や錯誤としているというようなとら方
- ③ 私的所有からとらえている 私的労働からはじめるべきという批判・・・私的労働という誤読  
第3節における価値の再規定 323P
- ④ 廣松理論は啓蒙思想意識論になっていて、前衛思想にとらわれている・・・マルクスのブルノー・バウアー批判と廣松さんのそのことの掘り下げからするとそんな押さえ方は出てこない

最初に書いたことと重複させつつコメントします。

①に関して

マルクスは哲学捨て、「実践的・批判的」構えとしてのマルクス 38P・・・ 廣松の哲学  
のパラダイム転換論は革命そのもの

二つの唯物論を区別する 42P

フェイルバッハの評価の違いによる唯物論へのとらえ方のマルクスの変化

哲学の外部への超出 85P

現実からとらえるという姿勢 89P

認識の問題と実践の問題の分離 93P

「認識について哲学的概念によって問い直すことは有益でありえるだろう」 99P

バリバールが哲学を必要とした 83P ことへのリンク・・・著者もマルクスの哲学の存在を否定し切れていないし、むしろ新しい唯物論とか物象化論というところで、哲学的論攷になっている

哲学を止揚したマルクス

マルクスの思想形成をスポイルしているから、マルクスが哲学を語らない中での哲学がとらえられなくなっている

マルクスの解釈がどちらが正しいのか、にどちらが近いのかではなく、マルクスをどう継承するかが問題

次に②に関して、・・・廣松さんは根拠ある錯誤としておさえています。廣松さんのマルクスは青年ヘーゲル派の中での論争の中で、思想形成してきた・・・そのことの中身としての実体主義批判からする廣松物象化論

さらに③ですが、マルクス『資本論』の価値形態論を巡る議論での著者の論攷は、単純生産を歴史的過程としてとらえることになっているようです。で、生産手段の私的所有に先行する私的労働という論理になっています。で、生産手段論が出てきて、私的労働ではなくなるという論の立て方になっているのです。・・・このあたり、わたしの再度の読み込みが必要なのですが、わたしが廣松派の学習した記憶では、価値形態論は歴史的過程としての単純生産ではなくて、論理的抽象としての価値形態論として押さえていたとわたしは押さえていました。そのあたりの著者の対話がないのです。

最後に④ですが、理論を問題にしていくと前衛になるとしたら、前衛党論になるのでしょうか、そもそも前衛党論がどこからくるのかのとらえ返しが必要ではないかと思うのです。

その他のメモです。

価値の実体としての抽象的人間労働 169P 素材としての抽象的人間労働

労働が素材であったとしても抽象的人間労働は素材ではないのでは？

物象化と物神崇拜の区別 196P・・・わたしは物神化を絶対化の問題としてとらえていません。

外化 246P・・・ヘーゲル

疎外とは主体の側からの物象化のとらえ返し 250P・・・「本質」などという古い哲学概念になっているのでは？

物象の人格化 253P・・・主体的に疎外としてとらえる、そのことを乗り越える契機??

むしろ哲学を必要とする論攷になっている 320P

転倒という内容 338P



素材的世界 359P 身体・自然・・・エコロジーとの接続する概念

ルカーチからの引用 392P 質料 *Materie* を素材に相当するとしている・・・アリストテレスの質料概念との関係

アソシエーションによる所有 390P

素材の思想家 398P そもそも素材の規定が出てこない、生きるための材料という概念につながるのかも、素材とはエレメント、素材を実体というとらえる物象化に陥って行くのでは？

具体的有用労働は素材たりえても、抽象的人間労働は素材なのか？

たわしの読書メモ・・・ブログ 207

・バンジャマン・ドゥスユ／ベルナルル・ラポンシュ『フランス発「脱原発」革命—原発大国、エネルギー転換へのシナリオ—』明石書店 2012

ブログ 204 の日本のフランス在住のジャーナリストの著は原発をかなり中立的な立場でとらえた本なのですが、この著はフランス脱原発の立場のふたりのひとが書いた著です。前の本ではフランスはきちんと情報を提供した上で原発を維持推進している様なことを書いていたのですが、この著では、むしろ日本と同じようにウソで塗り固められた状況を書いています。

この本は脱原発のシナリオというようなことを主題にして書いています。おそらく、日本の状況からも鑑みて、推進派からの反論も出ているのだろうと考えられます。その上で再度の反論の中できちんと整理されたものが必要になっているのだろうと思います。

この本を読んでいるときに大飯原発の再稼働が「決定」されました。それにしても意味不明な再稼働の論理だったのですが、とにかくふたつのことから論を詰めていく必要があると思っています。

ひとつは、代替え案を出せということ自体の批判です。危険だといっているのに、代替え案を出せというのは、そもそも危険ということを捨象していて、誰が責任をとれるのかという問題なのです。

もうひとつは、現実に論に内在して、きちんと批判しきるという作業です。細かい内容について、わたしはちゃんと追えていません。ですが、どうみても、国際競争力や、電力会社の経営に配慮した再稼働ということではしないと、押さえています。

いつものように気になったところのメモを残します。

消費者から行動主体へ 112P

市民のエネルギーと共有エネルギー 115P

成長とエネルギー消費は正比例するものではない・・・切り離し得る 121P

2つのシナリオ 125-129P・・・「ノエ」と「450ppm」

生産性第一主義批判

効率化／節電／再生可能エネルギーという3本柱での脱原発

## 時局川柳（2）

再稼働電力会社の金儲け

再稼働の理由がいろいろ言われていましたが、結局電力会社の金儲けを支えるというようにしかとらえられません。

どうやって責任取れる再事故に

腹でも切ってみますか一万回

昔の政治家たる武士は責任をとるために腹を切ったようです。腹など切られたら迷惑きわまりないのですが、腹を切ることが責任の取りようだとしたら、腹を一万回切っても、とれる責任ではないのです。

海汚し大地汚して故郷<sup>くもと</sup>枯れる

責任を言う首相の無責任

### （編集後記）

◆ちょっと遅れました。母が何回目かの転倒、2回目の骨折でゆっくり考える時間がとれず、母の老い、わたしにも迫ってきている老い、その中でわたし自身が、この差別社会のなかで、ずっととらわれてきた差別性を理論の中で少しでも止揚しようとしつつ、差別性を引きずりながら、介助のありかたの試行錯誤を重ねています。読書メモの「認知症論」は老いの問題に基底的に通じています。わたしは差別を克服して運動に参入できたのではなく、差別的だったから、差別をひきずっているからこそ、そのことをかけて、わたしがとらわれてきた差別的関係を止揚するために活動していこうと思っています。

月刊的になっていたのですが、煮詰め切れていないということがあり、月刊と隔月を行きつ戻りつの態勢にします。

◆巻頭言は、「何でこんな論攷？」が出てきたのか、読者のみなさんにとらえられるのでしょうか、いろいろ議論をし、見ていると、「障害問題で進んでいる西洋、遅れている日本」という構図があり、西洋に如何に近づくかというようなところで日本の「障害者運動」の政治が進んでいるようなのです。しかもロビー活動に集約することとして、それを支える学習会をかさねるというような態勢のようなのです。そもそも、「障害とは何か」という議論も押さえられないままにです。焦点は「障害の社会モデル」を巡る論争だったのですが、その議論が煮詰められないのです。わたしが今中心にしている課題です。いろんな形で論攷と対話を進めていこうと思っています。

◆前号で、「日本の原発稼働がゼロになりました。」と書いたのですが、政府・関電は大飯原発再稼働へ動き出しました。テント村、福島的女性たち、それからインターネットを利用した若い人たち、そして「文化人」のひとたちの脱原発の動きが出てきています。日本の永田町の政治状況は、もはやどうしようもないところまで来ていますが、草の根の運動に日本を動かす期待をもっていく、そのことに参加していくことではないかと思うのです。動けないなかで、何か少しでもと、反原発川柳のようなことを書いています。川柳という

形には斜に構えた批判ということなので、論理の正攻法で批判してきた立場で、なにか抵抗感もあるのですが、小難しい文ばかりでなく、感性に訴えるということで、出してきました。この「通信」だけではとても届いていけないので、何か他の方法も模索していきます。

◆読書メモは読書がジクザクになっていて、何をテーマにしているかわからないととらえられるかもしれません。わたしが今テーマにしているのは、「障害の社会モデル」から関係モデル的なことを整理し広めていくための論考。総体的な反差別論とそのことにつながる各論。認識論的なところでの、とりわけ物象化論的掘り下げ。反原発とエコロジー的な論攷です。それらに繋がる基礎学習的なことも入れ込んでいます。今回は先送りしているフェミニズムの本に入る予定ですが、何か新しい本が出て、コメントをいそぐことがあれば、間に挟むかもしれません。

◆読書メモでコメントした『マルクスの物象化論』にきちんと対話し投稿しようとか、「断章」としてまとめようとしていたのですが、マルクスの読み切れていない文や、廣松さんの読み直しが必要になっていて、時間がとてとれないでいます。この文献的に詰めた論攷に、むしろざっくりしたコメントも意味があるのかもしれませんが。廣松さんと一緒に『資本論を物象化論を視軸にして読む』で共有化の作業をした共著者のひとたちから何か反論が出ないかと期待しているのですが、・・・。

◆この本『マルクスの物象化論』は、いろんな前提を共有化していないと読めない本です。わかりにくいということでもちょっと考えてみます。この本のテーマで、もし、一からわかるように書くとしたら、十巻くらいの本になるでしょう。それだけの分量の本を読むのはむずかしく、逆にわからないとなります。だから、この本のように註をいれて参考文献をあたりながら読み込んでもらうという手法になり、よく言われる「学問に王道なし」というところで丹念に読み込んでいくことを提起することになります。しかし、そもそも学問をやっているわけではないひとにはそんなことを求めることはできず、むずかしいと却けられてしまうこととなります。以前わたしが本を出した後でメールのやりとりをしているひとから、「今まであなたが書いている文を全部読んでいることを前提した文を書いている、そんな文につきあってくれるひとがいるの？」という批判をもらったことがあります。もうひとつ、別のひとから「だれを対象にして文を書いているのかわからない」という批判ももらっています。わたしがまずやろうとしていることは、論的な深化です。わかりにくいということについてはついてまわります。そもそも、学問をやってきたひとには指導教官がいて、論文の書き方の指導をしてもらったりしているのですが、わたしのように独学してきたものにはそんな訓練も受けていません。ともかく試行錯誤していくしかないと思っています。

## 反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

### ■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

### ■連絡先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp)

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>